

今年是被爆80年、節目の年です。協会是被爆体験者を支援する活動に取り組んできました。昨年中は、訴訟に関し全国の協会会員等を中心に3万筆近い署名が寄せられるなど、裁決への期待が盛り上がりを見せた分、9月の長崎地裁判決はまことに残念でした。今年の年頭に際し、これらの活動と一緒に取り組んだ元毎日新聞記者でフリージャーナリストである小山美砂さんにお話を聞きました。

理不尽な長崎地裁判決 黒い雨には放射能は含まれるが、灰には含まれない

本田 昨年は毎日新聞長崎支局の樋口岳大記者にこの場に来ていただきました。彼は被爆者・被爆体験者を長く追いかけている記者ですが、小山さんも毎日新聞出身です。

小山 広島支局で「黒い雨」を追いかけていたら、「オークリッジレポート」(注1)の存在にぶち当たりました。これを発見した本田医師に興味が湧きました。それが本田先生とのお付き合いのきっかけですね。もう5年前です。2017年入社なので、本田先生の「オークリッジレポート」発見時の2012年は記者になっていません。

黒木 原爆、広島黒い雨にずっと興味を持っていたのですか。

小山 原爆については自分が知らないことばかりでした。大学時代に被爆者の証言に初めて触れました。衝撃的でした。全然何も知らなかった自分が恥ずかしかったので、自分みたいな知らない人に「伝えたい」と思いました。被爆地を希望したら、広島に配属され、そこからずっと携わってます。

黒木 元々新聞記者を志していたのですか。

小山 アナウンサー志望でした。大学2年で「新聞記者が面白そうだ」と思ったのがきっかけです。

本田 小山さんはいつも資料が豊富ですが、今日も用意されているのですか。

小山 はい、9月9日の判決文です。私は当日長崎地裁に来ることができました。本田先生はどんな思いで判決(注2)を聞いたのですか。

本田 「勝てる」と思い、乗り込みましたからね。敗訴の判決文は短いのですが、今回は原告番号を読み上げ始めました。弁護士はこの時点で「一部勝訴」と気づくらしいのですが傍聴席からは分からない。弁護士団の顔がこわばっているから、「全員勝訴ではないぞ」という雰囲気徐徐に伝わってきました。問題点だらけの判決に怒りを通り越しています。

小山 私も腹が立って、読み進めるのにすごく時間がかかりました。本当にひどいですね。「一部勝訴」は巧みだと思いました。何か聞こえがよく、よさげに見えます。

本田 「負けはない」と思っていたものの全くの予想外。一部勝訴は裁判所にとっても、苦しい判決だったと思います。

小山 そのとおりです。広島判決(注3)と比較しながら読みましたが、広島勝訴が全部ひっくり返った印象を持ちました。そもそも、被爆をもたらすものを「黒い雨」だけに矮小化したことにすごく腹立たしかったです。あと、被爆の可能性ではなく、その高度な蓋然性が必要だということを言い出しました。そんな科学的なことを原告に求められませんよ。

本田 マンハッタン調査団の報告書(注4)が信用できないことからスタートし、広島判決のように「否定できないことをもって被爆者と認める」ということをすれば、被爆地域が拡大します。しかし、本当は裁判所がそのことを考える必要はなく、国が考えることです。国が被爆地域の拡大を恐れたのが本音だと思います。

小山 だからマンハッタン調査団の報告書は絶対に認めたくなかったわけですね。

本田 認めないけど、広島判決との整合性を取らなければなりません。だから、「黒い雨が降ったか、降らなかった」ではなく、「黒い雨には放射能は含まれるが、灰には含むとは認められない」というところに落としただけです。

小山 その矛盾すごいですよね。

本田 広島黒い雨判決も、その基準も別に雨だけに限っていません。降下物である灰も同じように扱っていますが、長崎地裁は苦しい判決になっています。

小山 そうですよね、実際広島でも灰の被害が否定されていません。

本田 でも、長崎では灰は駄目だって書いてあります。

小山 雨だけを認めて灰を排除する理由が全然成り立っていないと思います。

本田 地裁よりも高裁が国寄りだと言われていました。前回の訴訟では10名は長崎地裁で勝訴したものの、福岡高裁で逆転敗訴でした。控訴審はかなり厳しい戦いになります。

ジャーナリスト・小山美砂さんに聞く 被爆体験者への差別・分断、切り捨てる司法 長崎・広島から



中央に小山美砂氏、向かって左は本田会長、右に黒木広報新聞部長

〈小山美砂氏プロフィール〉
2017年毎日新聞社入社。広島支局に配属され、「区域外の被爆者を訪ねて『黒い雨』の原告は訴える」と題する記事を連載し、被曝した当事者とその支援者計約100人に取材。それら証言をもとに、2022年7月に集英社新書から『「黒い雨」訴訟』を刊行し、第66回JCI賞を受賞。「日本の被爆者運動全体の歴史を含む(中略)『黒い雨をめぐる被爆者運動の俯瞰図』をまとめ上げた初めてのドキュメント」と評された。2023年1月からフランスとして広島を拠点に取材活動を続けている。

真実を伝えたい 広島・長崎原爆が現在進行形であること

黒木 小山さんが広島黒い雨の取材をはじめた頃はどんな思いでしたか。

小山 過去の問題ではなく、「原爆を『今の問題』として捉えたい」という思いがずっとあります。だから現在進行形です。当事者の話を聞くことで、無知だった私に変化が芽生えました。

本田 長崎・広島以外の県との温度差が大きいですよね。被爆者という言葉は分かってても、被爆体験者や被爆の実相は知られていません。

小山 広島黒い雨訴訟の原告全員が11障害、原爆放射線の影響を否定できないとされる病気に罹患していたことに衝撃を受けました。深刻な被害があることを知って、「今聞いておこなくては」との思いから、取材がはじまりました。そこでわかったことは、黒い雨を浴びた方は貧困と病との闘いでした。つまり、「病気で働けなくなり、収入がなくなる」など、大変な思いをしながら、援助もなく、生きてきました。戦争を始めた国の責任は果たされておらず、本日に生活とか、命に密着した問題であることが分かりました。記者3年目の秋のことでした。

本田 そこが著書「黒い雨」のスタートラインですか。

黒木 2022年7月に著書『「黒い雨」訴訟』を刊行されましたが、きっかけを教えてください。

小山 黒い雨被爆者の取材を続けるうちに、「これは一冊の本として残さなければ」という思いを強めていきました。多くの方から「私たちは嘘をついているわけではない」「事実事実として残さないと」という言葉を受け取り、彼らの証言をなんとか後世につなぎたいと思ったためです。裁判で負けてしまえば、彼らの訴えや証言が歴史に残らないのではないか、という危機感もありました。黒い雨被爆者の証言や運動の経緯を記した本は、彼ら自身が自費出版でまとめた書籍しかなく、一般の人に広く届け、長く読まれるような本が作りたいと思いました。そう考えていたところ、私の報道を見た方から「本を書いてみないか」と声をかけていただき、出版社も「絶対世に出すべき本」と応じてくださいました。広島地裁判決(2020年8月)が出る前から書き始めて、その後の経緯も取材しながら、約2年半で書き上げました。

本田 被団協のノーベル平和賞、NHK朝の連ドラ『虎に翼』によって、原爆、長崎・広島への関心が高まったことは有意義だったと思います。

小山 同世代にどう伝えていくか、私も苦戦してます。ある被爆体験者への取材ですが、被爆後、彼女は体調が悪い中、お母さんの看病をしています。今で言えば、ヤングケアラーです。それを見出しにしたら、かなり読まれました。現在と繋がる言葉を使って伝えていくことが大事だと実感しました。今回のノーベル平和賞受賞のような大きな出来事があると注目されますが、一過性で終わってはいけないと思います。

映画「オッペンハイマー」の大ヒット 原爆被害者は悲しさと怒りが込み上がる

本田 映画「オッペンハイマー」は全世界で3000万人が観ました。核兵器への関心が薄いと言われる中の大ヒットです。原爆開発・実験にスポットが当てられましたが、被爆者や被爆体験者の姿は出てきませんでした。被団協のノーベル賞受賞を嬉しく思いますが、この盛り上がりの中で取り残されていく被爆体験者に心が痛みます。

小山 痛みますね。だから取り残さないためにどうしたらいいか、と悩みます。

黒木 映画「オッペンハイマー」は率直なところどうでしたか。

小山 試写会で一緒だった被爆二世の方は「実験の映像で気持ちが悪くなって涙が止まらなくなった」「あのような科学者の思惑に翻弄されたのか。科学的な追求の中で悪魔の兵器が生まれ、家族が犠牲になったと思うと、本当に悔しい」と言われていました。その言葉を聞いて私の視野の狭さが恥ずかしくなりました。この映画で傷つけられた被害者がいることを忘れてはいけません。映画で描かれなかった部分を私達の手で伝えていく必要があります。

本田 裁判では古賀・間の瀬・戸石地区の3地区は認められました。でも、隣接する網場・日見地区は除外されています。網場は黒い雨の証言が多く、逆に戸石は少ないです。西山から雨が降ってきて、間の瀬でたくさん降って、矢上まで降りました。その後は、小降りになって戸石に流れています。だから、人口と証言調査数の比率からすると日見の方がずっと高いのです。

小山 ひどい分断政策です。「多い」「少ない」を分ける基準も明確にはありませんでした。

本田 「東長崎3地区は認めるけど、他の地域は非該当」「これ以外は広げない」という意志です。判決後は、政治的判断に期待しましたが、私は鈴木長崎市長は頑張ったと思います。

黒木 長崎の原爆式典にイスラエルを招待しなかったことは、勇気があることだと思います。

小山 広島市よりも、長崎市の核兵器廃絶・反戦運動、言論がすごく進んでいると感じています。広島市は何か意志がないというか、ふわふわしています。

本田 昨年5月に長崎・広島で被爆体験者問題でリレーシンボを行いました。あれを機に署名、そして判決へと、ずっと盛り上がって、初めて被爆体験者と首相との面会が実現しました。西岡秀子衆議院議員をはじめ議員さん方が奮闘し、メディアも後押ししました。首相との面会は、制度を変えることに繋がるわけです。その日の首相は珍しく訥弁で、裏返せば原稿の棒読みではなく、首相自身の声だと感じられるものでした。一方、判決後の会見・上告の会見は本当に流暢に話していました。そのギャップが歯がゆいです。

黒木 米軍は原爆投下後に実に丁寧に調査していますので、やはり実験のつもりだったのでしょう。その米軍の調査を認めないというのは、政治的な話になりますか。

小山 「核の傘」に頼る日本政府は、米国の核戦略に配慮しているように見えます。そういった中で、マンハッタン調査団の報告書は米軍のものだし、否定できないはずですけどね。

本田 長崎地裁では、被曝線量は一切問題にせず、広島に例に沿って裁判を進めました。広島に併せれば、長崎では島原半島まで被爆地域が拡大します。だから、国は黒い雨はなかったことにしたいのが本音です。

黒木 核や原爆に興味がある若い人は高齢者と一緒に運動をやりたがらないようです。そういう印象ありますか？

小山 世代が違うから、考え方も、仕事の進め方も違うし、感性が大きく違います。年長者に力があって、それに使われる若い人のような構

（用語解説）

注1) オークリッジレポート
原爆投下後に黒い雨に曝露した人々は、そうでない人に比べて発熱などの急性症状が20倍高く発症していることを米国政府が調査しまとめた資料。本田会長がインターネット上で発見し、国内に黒い雨に被曝した1万3千人分のデータが存在することがはじめて公になった。

注2) 被爆体験者訴訟長崎地裁判決(2024.9.9)
被爆援護対象区域の外で原爆に遭い被爆者と認定されていない「被爆体験者」44人に対し、長崎

造になると、抵抗感が生まれます。私にもそんな経験があります。

黒木 小山さんでさえそうだから、世代間のギャップはかなりありますね。

小山 若い世代は独自団体で活動しているし、既存の団体と一緒に活動することもあります。知恵や情報を交換し合いながら、やっていけばいいのではないのでしょうか。

後世に語り、残していくために報道はどうあるべきか

黒木 若手のリーダー的存在の小山さんは若手世代にどのように働きかけていますか。

小山 昨年のリレーシンポジウムに同世代と一緒に活動している仲間を声をかけたら、たくさん参加してくれて、「被爆体験者のことを知ることができてよかった」と言ってくれました。そういう意味で世代間の架け橋になればいいですね。知る機会がないだけで、知ればみんな共感して一緒に動いてくれると思います。

黒木 フリーになると、自分が書いた記事を発表する場を失うということはないですか。

小山 意外と取り上げてもらう機会が多く、中国新聞への連載が最近ありました。フリーだからこそ、いろんなところから声がかかります。いろんな媒体で伝えられるから、フリーは面白いです。

黒木 今回の裏金問題、安倍元首相の桜を見る会のような特ダネは意外なところから出てくるような印象です。大手マスコミの現状をどう見えていますか。

小山 今でも、権力に深く食い込んで、いち早く情報がもらえる人が花形記者と言われたりします。本質的な報道が欠けています。本田先生が見つけた「オークリッジレポート」は大特ダネですよ。

黒木 本田先生、いかがでしょうか。

本田 元々は機密書類だったのが偶然ネットに流出してしまいました。私が今までに報道されていないことに気がついたことがはじまりで、原爆の黒い雨に関する知識がなければ発見にはならなかったと思います。

小山 特ダネは知識の積み重ねがないと生まれません。知識がないと価値を見いだせません。本田先生の行動は本当に素晴らしい仕事でした。

黒木 今年は被爆80周年など、長崎はいろんなことが目白押しです。

本田 IPPNW(注5)のノーベル平和賞受賞は1980年代後半、その時は非常に大きく盛り上がりました。長崎では朝長万左男先生が八面六臂で頑張っておられます。今年を機に全国でも活動を継承しなくてはなりません。

小山 医師が果たす役割は大きいです。広島は新基準での認定がはじまっていますが、医師の証明書が必要です。黒い雨被害者に寄り添った対応をする医師もいれば、残念ながらそうでない医師がいます。医師が被爆体験者問題に関心を持つことで世の中は変わると思います。

黒木 被爆体験者医療ひとつとっても、被爆体験者を被爆者と認めないために生み出された制度であるという前提の部分がわかっていないと制度への理解が進みません。首相が指示した国の対応で「対象疾患が拡大されたから前進」のように見えますから、やはり、知ること、伝えることが大事です。

小山 本当におっしゃるとおりですね。制度の背景とか、被爆体験者の苦しみを知ることです。保険医協会を通じた啓蒙活動は本当に意義深いものです。

本田 YouTubeをはじめ、SNSは関心のスタンスが短いです。若い世代によってメディアの質が変わろうとしています。SNSでは被団協のノーベル賞受賞は重要視されていません。

小山 社会的重要性よりも、SNSはみんなが飛びつく話題や、事件が取り上げられます。既存のメディアは本当に苦労しています。若者世代に、「平和の記事は悲惨な体験をした人のインタビューがあって、最後に「忘れてはならない」と締めくくる流れがテンプレート化している」と言われました。紙に載ってるだけでは読まれない時代です。

黒木 これからどんな記者として活躍し、どんな記事を書かれますか。

小山 核による被害者の救済・援助に軸を置いています。昨年、旧ソビエトの核実験場でカザフスタンにあるセミパラチンスクを取材しました。核によって苦しむ人がたくさんいました。彼らを支えつつ、被害者を生み出さない社会を目指したいです。それは核兵器をなくす、核をなくすために本当に必要なプロセスだと思っています。広島を拠点にしつつ、長崎にも通って、被爆体験者問題も伝えていきたいです。

判示して被爆者と認定した。

注4) マンハッタン調査団報告書
調査目的は、原爆の都市および住民に対する総合的な効果の観察および放射線に特有な効果の全てを明らかにしようとするもの。

注5) IPPNW(核戦争防止国際医師会議)
核戦争を医療関係者の立場から防止する活動を行うための国際組織。1980年設立。本部はアメリカのマサチューセッツ州モールデン。各国に支部があり、日本支部は広島県医師会内にある。